

愛·自由·幸福
河盛好藏

新潮文庫



あい　じゆう　こうふく
愛・自由・幸福



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 青26 A

昭和三十四年一月二十四日 発行
昭和四十八年八月三十日 十九刷

著　　者

河　盛　好　藏

発　行　者

佐　藤　亮　一

発　行　所

株式會社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一二一
振替東京 八〇八番

乱す、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

愛・自 由・幸 福

河 盛 好 藏 著

新 潮 社 版

1245

目次

・愛について……………	七
・愛情について……………	二
・家族愛について……………	六
父と子……………	二四
・男女間の友情について……………	四一
・プラトニック・ラヴ論……………	四七
ぼるとがる文……………	五
・自由について……………	六
・ボン・サンス……………	六
・想像力について……………	七
・育ちのよさについて……………	九
・女性の誇りについて……………	三

・ 近代的淑女とは……………	八九
・ 女性の魅力について……………	九三
・ 芸術の教養について……………	九九
・ 幸福について……………	一〇八
青春の意義について……………	一二四
悔いなき青春……………	一二三
理想の結婚について……………	一二六
結婚難について……………	一三三
夫婦の性格の相違について……………	一三九
姉の力・妹の力……………	一四四
女の学校……………	一五三
運命について……………	一六五
恋愛の将来（アンドレ・モロア）……………	一七二
あとがき……………	二〇三

愛・自由・幸福

愛について

——序にかえて

ヘルマン・ヘッセに、「世界戦争の四年目に」と題する次のような詩がある。

たとえ夕暮が冷たく悲しく

雨がざわめいて降っていても

わたしは今、自分の歌をうたう、

誰が耳を澄して聴いているかは知らないが。

たとえ世界が心痛の中に息をつまらせているにしても

あまたの場所で

おそらく誰にも気づかれず、心静かに

愛の心が燃えつつけている。

（片山敏彦訳）

私は戦争中に、心の衰えを感じるときには、いつもこの詩を口吟んで心を慰められた。眼にうつるものは、荒廃した焼けあとと、憎しみと呪いにみちた人々の表情だけであつたけれども、ど

こか自分の知らないところで、愛の心が燃えつづけているのだと考えることによって、私もまた愛する心を失うまいとする勇気を出すことができたのである。だが、呪わしい戦争の終った現在でも、人々の心のなかには、依然として冷たく悲しいたそがれが立ちこめていないであろうか。人々は世界を被う新しい不安の影に怯えて、心痛のなかに息をつまらせてはいないであろうか。私たちは過去の不幸をくりかえさないために、今こそ力強く愛の心を燃え上げなければならぬ。

愛について語ることは戦後の一つの流行になっている。それほど人々は愛情に飢えていたのである。しかしながら、一切の言葉がそうであるように、愛についての美しい言葉も、それが繰りかえされているうちに、初めてそれらの言葉が書かれ、口にされたときの喜びや悲しさ、または悩みのもつ深い味わいと生命を失って、人々の間に無造作に投げかわされる合言葉のようなものになってしまった。そのために、心ある人は、愛について語るよりも、むしろ沈黙をえらぶほどになっているのである。だが、私たちは絶えず新しい情熱をもって愛について語らなければならない。人々の心のなかに豊かな愛の源泉を湧き出させることに努力しなければならない。愛は人間を幸福にする最も強い力だからである。

しかし一口に愛と言っても、愛にはさまざまな形がある。与える愛、奪う愛、許す愛、裁く愛。私たちの愛はその対象にしたがって、これらの愛のいずれかの形をとるのであるが、私たちの愛が純粹であるためには、いかなる場合にも、自己犠牲が第一に求められる。最初から報酬を期待した愛、自己の幸福だけが目的の愛は、まことの愛ではない。恋愛のような、最も個人的な、自

己中心になりやすい愛についても、『愛の哲学』の著者グスタフ・ティボン氏は、「幸福になるうとする憧れが、一緒になりたいという熱情の前に消える時、初めて愛は純潔である。二つの存在がただ幸福になりたいという欲望によって繋がれている限り、彼等は愛し合っているのではなく、離れ離れである。愛することは二つの喜びを共にすることではなく、生命を共にすることである」(カンドウ神父訳)と書いている。またフランスの小説家サン・テグジュペリは、「愛するとはお互いに見つめ合うことではなく、二人が同じ方向に目を注ぐことである」と言っているが、愛は私的なものをふりすてることが多ければ多いほど、それは純粹になる。しかし純粹な愛は、自己の情念をできうるかぎり排除しようとする、まさにその理由のために、ともすれば弱いものになりやすい。強い、純粹な愛を持続して抱きうる人は神に最も近づいた人である。私たちは自分の愛が絶えず不純なものに惑わされ、せまい私的な幸福を目ざしやすいことをよく知っている。愛を口にしながら、実は愛とは全く反対の方向に歩いているのが私たちの現実の姿なのである。

だが、たとえ不純なものをそのなかに含んでいようとも、私たちは何かを愛さないではいられないことも真実である。「愛はスペインの旅舎に似ている——そこには自分の携えて行ったものしか見出せない」というのは、『カルメン』の作者の皮肉な言葉であるが、私たちの愛が何ら積極的なものを加えない結果に終わろうとも、ともかく愛する心をまず燃やさなければならぬ。愛は、愛することによってのみ学ばれる。抽象的な愛は、いかほど純粹な形をしていても、少しも私たちを高めはしない。私たちの目を注ぐべき方向は言うまでもなく世界の平和であり、人類の幸福と進歩である。それに至る道がいかに遠く、困難であるとしても、それを志さない一切の行

為は人間的と言うことができない。私たちは愛することを学ぶことにより、自らそれを実践することによって、少しでもその目的に近づこうではないか。

「愛は重荷とはならない。この枝はその上にとまった小鳥が飛び立つとき、初めて折れる。私の心が破れ裂けるのは、君が私に余りよりかかる時ではなく、君が私を置きざりにする時だ」とティボンが書いている。私たちはお互いに愛を失うことによって人々の心をまた破り裂いてはならない。

愛情について

愛情について、という課題を与えられているのであるが、どうも私にはろくな答案が書けそうにないのである。現在の日本は、人々の心が最も荒廃している時代であるから、私たちはお互に愛し合わなければならぬ、というようなことを、たとえそれは正しいことであるとしても、そんなことをいくらくどくどと書いてみたところで、問題の解決には少しもならないからである。どんな人間でも、人を憎むより、愛する方が好ましいのにきまっている。いや私たちはお互にとげとげしい気持で、そうでなくてさえ不快で不自由なことの多い毎日を送るのに飽き飽きしているのである。なんとかして人々の心に愛の灯をともしたい、その光によって私たち自身も温められたいという願いに燃えている。にも拘らず、見ることに聞くこと一つとして私たちの心をいら立たせ、私たちの心に憎悪の種を植えつけられないものはない。愛情というような言葉さえも時としては、それを見るのも腹立たしい気持である。

私たちは自分の不機嫌な表情に、我ながら烈しい嫌悪の念を抱きながら、他人の同じような不機嫌な顔を眺めると、自分の醜い顔を鏡に写したような気がして、ますます不機嫌になるのである。そんなら私たちが愛情に対して冷淡であるかという、決してそうではあるまい。いや、今日ほど人々が愛情に飢えている時代はないのである。愛情に飢えながら、愛情に対して冷たい眼

を向けている、というところに私たちの悲劇があるのである。私が幾度も筆をとりあげながら、一行書くごとに、何かしらじらしい氣持がして行き悩んでいるのもそのためである。一口でいえば、戦争から受けた傷手があまりにも深いために、私たちの現在の不幸の原因が、従って、それを癒やす方法がどこにあるかを探し求めているうちに、至るところに生々しい傷口を発見して、この調子で行けば、どこまで傷が深いか測り知ることができないという恐怖に、いわば立ちすくんでいる状態といえよう。それを徹底的に抉り出してみる勇氣に乏しいために、いかなる適切な手を打つこともできず、徒らに精神の衰弱を重ねているにすぎないのである。そうして、その氣持が烈しい孤独感となつて、骨を噛む寂しき、やるせなさに苦しめられている。

例えば私はこんどの戦争で母と弟とを失つたのであるが、その当座は私と同じような悲劇に遭遇した人があまりに多かったために、自分の不幸についても大して深刻には考えなかった。しかし近頃では、深夜にひとり眼を覚まして、この現世には、自分の肉親がもう一人もいないのだと考え始めると、居ても立ってもいられない氣がすることがある。だがその心の苦しみを一体誰に告白すればいいのか。それよりも、そんな苦しみを人に打ちあけて、何らかの慰めを求めようとするのがそもそも間違っているのではないだろうか。それは飽くまでも自分一個の問題であり、自分一人の胸にしまつて置くべきことである。いまの日本には、自分のような例は至るところに転がっているではないか、と絶えず反省する。しかし、そのように考えることは実は私にとつては何の慰めにも、諦めにもならず、自分の氣持を一時ごま化して置いて、その解決を先に延ばして置くにすぎないのである。自分の不幸を広く一般の問題に結びつけることによって、そこ

に何らかの解決を求めようとするためには、その痛手があまりに深刻であり、また、自分の不幸を他人に示すことによつて、その人の不幸を慰めようとするような、余裕のある気持には到底なれないのである。誰も心が、触れれば血の出るような痛手を負っている時代に、どうして自分の心の傷口を人に見せつけることができよう。今日、愛情について最も語り難い理由は、一にこの点にかかっているように私には思われる。軽薄のそしりを受けることなしに、誰がいま愛情について人に説くことができるであらうか。

しかし私たちが一日も早くこの愛の沙漠から脱出しなければならぬこともまた事実である。生命の水々しさを、いつまでも頑なな心の壁のなかに閉じこめて置くことは許されない。それは人間性の本来に背くことである。だが、新しい愛情には新しい秩序がなければならぬであらう。

しからば新しい愛の秩序とは何であらうか。いま仮りに、新しい結婚生活に入ろうとする若い人々の場合を考えてみよう。私たちは既に述べたように、それぞれ深い心の痛手を受けている。それは老若男女を問わない。すべての人々が、人に語りたいと同時に、軽々しく人に打ちあけたとは思わない不幸と悲しみを心のなかに抱いている。そういう私たちが、自分と同じく心の傷手を負っている人と生活を、運命を共にしようとする場合、これまでのような、ただ将来に対する明るい希望のみに溢れて、結婚生活を始めようとする人々とは、根本的に違った心支度をしている筈である。私たちの愛情には最初から深いかけりがある。自分の魂をありのままに、裸のままで相手に示したい願いにかられながら、そうすることによつて相手の魂を傷つけはしないであ

ろうかというおそれがある。それは相手の心をいたわる気持でもあれば、自分の愛情の過度な流露を警戒する心の怯えでもあるであろう。私たちの心はまだ十分に相互の間で溶け合わず、お互いに切ない思いをこめながら、相手の愛情がその一線を踏み切ってくれることを待ち受けているのである。結婚生活を始めながら、相互の魂が深い孤独感からまだ十分に抜け切っていないのである。

のみならず私たちの前途は、私たちの過去に増してさまざまな障害や悲運に阻まれている。私たちの若さが大きな救いになっているとはいえ、もし日本の現状と将来について、一切の希望的観測を棄て去った冷徹な眼をそそぐときには、何人もその行路の困難にたじろがざるをえないであろう。私たちの周囲には高い厚い壁が巡らされ、しかもそのなかに於いて私たちは孤立無援なのである。これを私たちはそれぞれの個人の運命について考えてみても個人の自覚、男女の同権ということとは、私たちの運命を完全に私たち自身の手に戻してくれただけに、それを担ってゆく私たちの責任と負担は一層に重くなっている。

私は今でもはつきりと思い出すのであるが、パリの大衆食堂などで、一組の中年の夫婦が、お互いに口数少く食事をすました後で、一杯のコーヒ―を前にして各自が自分勝手の物思いに耽っているのを目撃したことが屢々であった。彼らは何らかの遊楽のつもりで、食堂で食事をとっているのではない。相互に職業を持っているために、家庭で食事をとることができないのである。彼らの結婚生活は夫婦の共同の出資によって営まれているために、そうしてその一方が欠けても彼らはその結婚生活を続けてゆくことができない経済事情にあるために、子供を生むことはもち

ろん避けなければならず、いわゆる家庭の団欒などということとは考えることすらできないのである。彼らはこんな風にして、やがてお互いに年を取ってゆくのであるが、彼らの結婚生活を支えているものは一体なんだろうか。それは単なる愛情だけであろうか、いや、むしろ相互に離れえない生活上の便宜が、彼らを已むをえず結びつけ、その運命に対する忍従が彼らに夫婦の形をした生活を送らせているに過ぎず、彼らの間にあるものは嫌悪と憎しみにすぎないのではあるまいかという印象を与えられるのである。しかしこのような性質の夫婦生活は、わが国にも今後は急速に増えてゆくのではないだろうか。少くとも今日、新しい結婚生活に入る人々の多くは、自己の未来の姿を彼らのうちに眺めて、それに対する方策を考えて置くことは必ずしも無駄ではないであろう。

話が甚だ抽象的になってしまったが、要するに私の言いたいことは、私たちが誠実に愛情の問題について考えるかぎり、これからの結婚生活には数々の危機が含まれていることを自覚せざるを得ず、それについての十分な明識を欠くときには、私たちは自己の愛情に形を与え得ないことはもちろん、相手の愛情をも十分に受けとることができないであろうということであった。

まず愛情の表現の問題がある。相手の愛情を信頼するかぎり、私たちは自らの愛情を残るくまなく示すことは当然であるけれども、相手に情念の表現を素直に受け入れる素地が十分に準備されていない場合には、あまりにも烈しい、求むるところの多い愛情は、相手の心を自己に惹きつける以前にこれに一種の疲労感、もしくは嫌悪感を与えて、一歩踏み出そうとする相手の心を、再び孤独のなかに閉じこめてしまう危険なしとしないであろう。温かい春の雨が、静かに大地に